



## 東日本大震災被災地訪問

東日本大震災発生から既に1年以上も経過した。

昨年の夏は震災直後でもあり、現地の復興にさまざまなボランティアが活動して、若い人を中心に大勢の方々が活躍していた。私のような年寄りの出番は無いように見え、東北を横目に見て新潟から北海道へフェリーで渡ってしまった。以来被災地の状況を一度も見えていないことがどうしても気になり、今年は被災地を訪問して自分の目で状況をよく見てこようと思っていた。

今年も例年通り北海道の山へ出かける予定にしているので、今年こそ北海道へ渡る前に、東北の被災地を訪問しなければならないと、被災地見舞いをする計画を立てた。被災地見舞いといってもどのような行動をしたらいいだろうかと年頭からいろいろ考えたが、私一人でできることなど何もない。「ただ見ながら通過するだけならば、単なる冷やかしの見物に過ぎない」といろいろ悩んだ結果、「私ができるのは、写真でメッセージを作り被災地に置いて励ましてくること」との結論に達し、写真メッセージを100枚近く作成して持参した。

出かける前は被災地の情報をいろいろ集めて、気になった場所、お会いしたい方がた、寄ってみたいお店などなどいろいろ考えていたのだが、実際に被災地に入ると、ただ瓦礫が所々に集めて積まれているだけで、被災当時そのままの惨状が延々と続き、行きたい場所がどこなのか、会いたいかたがどこに居るのかなど、突然行って探すことなどとてもできない、とんでもないことだということが分かった。たぶん目的とする一か所あるいは一人を探すのに一日近くかかるだろう。

一週間弱で被災地をほとんど回ってしまおうと思っていた私の考えの甘さが痛感され、被災地訪問を北海道山紀行のついでになどと考えていた自分のいい加減さを大いに反省した。

しかたなく各市町村の役場を訪ね、震災復興にかかわっている方々にお会いして、用意してきた「写真メッセージ」をお渡しし、お見舞い・激励をすることにした。

それにしても震災後一年以上も経過した現在のこの復興状況は何だろう。何も復興していない。流された家々は土台を曝したまま、学校や体育館、ホテルやスーパーなどの大きな建物は鉄骨をむき出したまま、庁舎を流された市町村は、プレハブの小屋で仕事をしていた。いたるところに設置されている仮設住宅群は一つの部落化していて、ちょっと異様な雰囲気を感じた。これから猛暑の夏を迎え、過酷な生活を強いられるのだろう。それどころかこのまま再度厳寒の冬を越さなければならぬのではないだろうか。

津波の被災地は実際に被害状況をこの目で見て良くわかったが、なんとも分からなくやるせない思いに駆られるのは、福島第一原発起因で発生した放射能のために、居住地を追われた市町村だ。緑豊かな山野に囲まれ田畑が広がり今までと何の変化も無い平和な村々に、シーンとして人影が見えない。村へ通じる道路はバリケードで封鎖され、警察官が常駐している。町役場や公共施設の立派な建物は封鎖され、村の中心地や住宅は遠くに避難させられた住民たちが結成した自警団がやってきて線量計を胸に付けて巡回警備をしている。

今回は素通りだけで本当に申し訳なかったのだが、実際に見て感じたことは、あまりにも広大な被災地のため、どこから手を付けていいのかわからないだろうが、瓦礫を集める重機の槌音はあっても復興のために動く重機の槌音が無く、明るい未来が感じられなかったことだ。

**早くなんとかしないと！！**



持参した「写真メッセージ」